

- 査し、『北海タイムス』紙上に発表とある。共和会については不明。
- *10 「責任」小島鐵廣原作脚色・加藤春雄画、大日本文化画劇報国社、1941年（通信総合博物館所蔵）。現物は未発見であるが札幌教育紙芝居研究会脚本・澤枝重雄絵の「コロボツクル」（翼賞紙芝居第5輯、1941年7月）など。なお中村一枝「史実の時代の要請を探る——吉良平次郎の遭難から」釧路アイヌ文化懇話会『久摺』第7号、1998年11月は「吉良平次郎」の表象を、国定教科書はじめとする各種メディアについて網羅的に検討したもので参考になるが、紙芝居作品については言及がない。
- *11 北海道綴方教育連盟を主な担い手とする北海道の紙芝居運動については、最低限、①生活綴方作品・文集それ自体の分析、②関係教員の個人史、③北海道地域教育の特徴とそれを教員がどのように主体的に問題として把握していたかという認識構造の問題、④教育科学研究会運動の特徴、⑤1940～1941年の北海道綴方教育連盟事件とその後の転向をふくむ戦時経歴史、といった問題群の解明・整理が課題となる。とりあえず今回の調査・研究会での報告のため参考

- にしたという程度にすぎないが、以下の文献を挙げておく。
- ・平澤是曠『弾圧——北海道綴方教育連盟事件』北海道新聞社、1990年
 - ・『開拓地北海道の子どもたちと教師』（清水康幸執筆）民間教育史料研究会／中内敏夫ほか編『教育科学の誕生——教育科学研究会史』大月書店、1997年
 - ・佐藤将寛『三浦綾子最後の小説「銃口」を読む——綴方事件とそのモデルたち』柏倉舎、2006年
 - ・佐竹直子『獄中メモは問う——作文教育が罪にされた時代』北海道新聞社、2014年
- *12 例えば「北海道開拓精神」論などのイデオロギーがどのように紙芝居作品に表現されているか、といった論点。榎本守恵『北海道開拓精神の形成』雄山閣出版、1976年、最近では田端宏編『街道の日本史2 蝦夷地から北海道へ』吉川弘文館、2004年、12～27頁。

北海道の教育紙芝居

坂本 紀子

（北海道教育大学函館校）

2019年8月3日、北海道立文学館において、北海道の紙芝居の歴史を、長年、追究してきた谷暎子さんを迎えて「戦時下日本の大衆メディア」研究会が開かれた。その研究会で「北海道の『教育紙芝居』」と題し、綴方教育に熱心に取り組んだ教師（以下、綴方教師と称する）と紙芝居の関係、および道内における紙芝居関連団体の動向について報告した。その内容を、報告の際には説明不足だった部分も補いながら紹介し、道内における教育紙芝居の歴史をさらに追究するにあたっての今後の課題を整理してみたい。なお、北海道の紙芝居研究は、谷さんの大きな功績の他は未調査・未検討のものが多く、本報告内容も端緒に留まっている。そのため、今後の課題を意識的に多く記述したことをお断りしておきたい。

1. 教育紙芝居と綴方教師、新教育運動

1938年に創立された日本教育紙芝居協会が発行した同年10月号の機関誌『教育紙芝居』には、「北海道の教育紙芝居運動は、主として北海道教育綴方聯盟の同人によって支持されてゐる」¹と、当時の北海道における教育紙芝居の状況について記されている。「北海道教育綴方聯盟」とは、北海道綴方教育聯盟のことで、坂本亮（本名は亀吉であるが「亮人」「磯穂」の異名も使用している）が中心となり、小笠原文次郎、小鮎寛、土橋明次ら綴方教師と共に1935年に設立した教育組織である。日本教育紙芝居協会を設立した松永健哉は、同年、戸塚廉らと北海道・東北を巡回し各地の綴方教師と交流を深

めており²、おそらくその際に坂本らとも交流したと推察される。1937年に松永が設立した日本教育紙芝居聯盟の機関誌『教育と紙芝居』には、坂本や土橋の紙芝居の作品が紹介されており³、すでに二人は同聯盟の会員になっていたと思われる。道内の坂本ら綴方教師は、何故、紙芝居に傾倒していったのだろうか。

ちなみに、日本教育紙芝居協会は、1942年に北見で紙芝居の講習会を開催している⁴。1944年には、道内の国民学校や師範学校、女学校の児童生徒が作成した紙芝居によって「前線将兵慰問」を実施する打合せを関係者で行い⁵、釧路、帯広、室蘭、函館において講演して大型紙芝居を実演している⁶。また樺太の豊原、留多加、真岡、敷香、大泊などでも講演、実演を行った⁷。

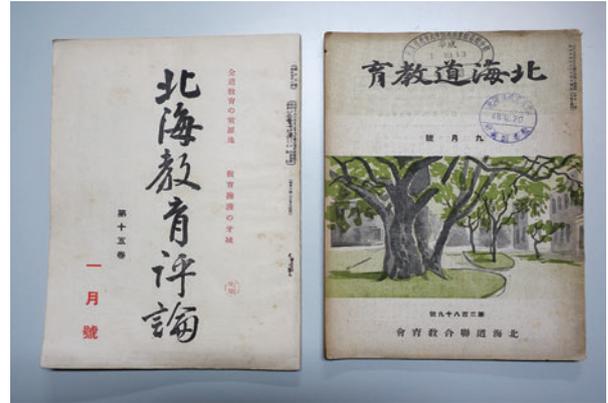
北海道綴方教育聯盟の『同人通信』第5号で坂本は、「綴方内部理論としては上昇出来るだけ上昇し、分化できるだけ分化し」たが、綴方理論は、現在「行き詰ってゐるのは事実である」⁸と記している。「綴方を健康に正當に発展させるためには、もう綴方の内部理論だけではどうにもなるものではない」とも述べている。坂本は綴方教育を、国語教育としての綴方すなわち文学的理論と通底する国語を教える立場から綴方を指導するのではなく、生活教育（生活指導と言い換えてもよい）の一方法として綴方を指導する立場にあることを同通信で記述している。嘗ては子どもたちの生活を何で導くか、その最も強力な指導方法として綴方を選んだが、いまや、綴方という方法そのものをさらに追究しても子どもたちの生



活を「よい」方向へ導くことはできない、と考えるようになっていた。「紙芝居のきらひな子供は一人もゐない」、「この絶大な子供の興味を教育的意味と繋ぎ合はす時の効果は説明するまでもあるまい」と述べる。そして、「よい書物を見る時くらゐ心の豊かになる時はない」とし、自ら読んで「涙の滲む思ひであった」リンカーンの伝記を、紙芝居にしたいと同通信に記述している。『同人通信』誌上の坂本の記述は断片的ではあるが、子どもが「絶大な興味」を示す紙芝居の、その中身を吟味、精選すれば、子どもの生活を豊かなものへと導くことができると考えるに至ったと思われる。子どもの生活を「よく」する生活教育を教育の基本においていた坂本が、子どもの精神的生活を豊かにできる可能性を持つ紙芝居に傾倒していく一端が、ここに見てとれる。坂本以外の北海道の綴方教師と紙芝居との関係については、当時の子どもたちの実態をふまえてさらに追究していく必要がある。

綴方教師以外の、当時、新教育を推進していた教師と紙芝居の関係についても検討する必要がある。ここでは当時の教育雑誌からつかみ得た一例を略述してみたい。

当時、北海道では様々な教育関連雑誌が刊行されていた。なかでも森善次（札幌教育会会長）と北海教育評論社を設立した石附忠平が中心になって編集した『北海教育評論』と、北海道連合教育会が編集する『北海道教育』は、二大教育雑誌として位置づけられていた。石附と森は新教育や綴方教育を推進する教師を後援する存在だった。紋別の渚滑しよこつ小学校教師・菅原茂は『北海教育評論』に「教育の目的は『子供の生活を高める』こと、それは『我々の有する文化を伝え』、『更によい高い文化を創り出す力を培う』ことにある」とし、子どもの精神活動が積極性を持つこと、子どもが興味関心を持って学習することが重要であると記している⁹。そして紙芝居には「与える紙芝居」と「作る紙芝居」があり、前者は子どもの「感銘と理解が得られ」、後者は「組織性」「創造性」の発展につながる、と述べている。子どもの「興味関心」を引き出し、「主体性」「積極性」「創造性」を重視することは、当時、日本で展開されていた新教育の指針であった。新教育に傾倒していた教師も子どもの「興味関心」や「積極性」を引き出す教材、方法として紙芝居を活用することに意義を見出していたと思われる。そして、「子供の生活を高める」高い文化の創造を「作る紙芝居」に期待していたと思われるのである。



『北海教育評論』と『北海道教育』

2. 北海道教育紙芝居研究会と北海道教育紙芝居協会

1940年7月に発行された『教育紙芝居』は、同年5月に北海道教育紙芝居研究会が発足したことを報じている。記事によれば、同会は道内の教師をメンバーとして北海道庁視学官や視学、支庁の教育課長や師範学校主事らを顧問におき、石附が会長を務め、幹事は30名、そのうち12名の常務幹事が中心となって運営する組織だった。その常務幹事のなかに、坂本や土橋がいた¹⁰。研究会結成の趣旨には、

- (1) 都市に於ても児童の文化施設は極めて不十分な状態である事は明知の事であるが(略)北海道の小学校総数二千百の中、その五割は単級複式であつて、年に一回防火宣伝の映画会もあるなしの実状である。
- (2) 街の紙芝居が如何に安価な涙をそゝりグロテスクなものであるかも多言を要しない所である。
- (3) 紙芝居を通じて精勤運動の一半を荷ひ得るのであるが、この事は社会教育の一つとして我々学校教師に與へられた重要な使命である(略)。
- (4) 本道拓殖の意義は、今新に全道民にその精神となつて蘇らねばならないのであり、(略)国民教育を通じて幼い道民の一人々々にその理解と訓練を施さなくてはならないのである。

と、北海道の地域の実情と、それをふまえた学校教員の「使命」としての「精勤運動の一半」として紙芝居を位置づけている¹¹。

北海道の農村は、欧米式農法を採用した「開拓」政策のもと、農家は各戸が所有する土地のなかに住居を構え

る「散居型」「疎居型」すなわち各戸が分散する農村構造を有していた。そのため農村地帯の小学校は、一校あたりの生徒数が少なく、すべての学年で1学級を編制する単級学校や、三つの学年あるいは二つの学年が1学級を編制する複式学校が、全小学校数の約6割を占めていた。また移住者が入植して間もない地域は、社会資本も未整備であるなど「文化施設」の設置も「極めて不十分」だった。そのような北海道の実情をふまえると、紙芝居には「本道的意義」が認められると上記の「趣旨」に述べられている。

そして「北海道的作品の製作」を目指し、「北海道の歴史に取材するもの」として「アイヌ伝説」や高田屋嘉兵衛などを取り上げること、北海道の主要産業産物が本道並びに日本全国に、いかに重要な役割を持つかに触れることや、「名作物語」や「精勤に関する物」も作品として描くことが目指されていた。実際にどのような作品がどれくらい製作されたのかは不明だが、『北海道教育評論』から活動の断片を拾ってみると、1940年7月には、宗谷（枝幸）と日高を「実演巡回」している。同研究会が北海道の実情をどのように見据え、紙芝居のどのような点に有効性を見出したのか、今後、より明らかにしていく必要がある。

1940年11月、坂本、小鮎が検挙され、翌年の1月には道内の小学校教師50数名が検挙された。この後に、札幌教育紙芝居研究会が設立され、さらに7月には北海道翼賛紙芝居協会、12月には北海道教育紙芝居協会が設立されている。また同年には、樺太紙芝居研究会も設立された。

札幌教育紙芝居研究会は、会長に石附、幹事長に森をおき、「北海道児童文化への寄与」を目的として、市内約18名の訓導で組織された¹²。北海道翼賛紙芝居協会は、事務所を札幌市時計台内においた。国後島留夜別村のすべての小学校6校が同協会に加入したと『北海道教育』は報じている¹³。同協会は、「紙芝居3冊を1組として、1校3日を限度に定期配給を行っ」たという。北海道教育紙芝居協会は、1944年に協会内に北海道庁慰問紙芝居献納部をおき、道庁が8千円の予算をもって「慰問紙芝居」を募集したとされている。さらに道庁および札幌通信局などの後援により、札幌で紙芝居講習会を開催した¹⁴。また、全道の国民学校、各文化団体に呼びかけ「作られた紙芝居」を募集し、600種を自作して在満郷土部隊に献納している¹⁵。樺太紙芝居研究会は、「島内の紙芝居代表者を豊原に集め、商工会議所で

研究会を開き、同時に文部省推薦の文化映画も公開」し「全島を巡回講演」した、と雑誌『紙芝居』に記述されている¹⁶。

綴方教師や新教育を推進した教師の検挙後に、新たな紙芝居の「協会」が次々と設立されるが、それらが教師の検挙とかかわりがあるのかどうか、北海道教育紙芝居研究会と、教師たちの検挙後に設立された紙芝居協会の性格や活動の共通性、異質性について、さらに明らかにしていく必要がある。実演された紙芝居作品の内容についても比較する必要がある。また、樺太紙芝居研究会および千島における紙芝居の活動状況を追究し、北海道の紙芝居団体とのかかわりを明らかにしていくことも課題となろう。

3. 街頭紙芝居

今回の報告において、北海道の街頭紙芝居についてはほとんど触れることができなかった。谷さんは、紙芝居業者は函館に20人ぐらい、札幌、小樽、旭川、室蘭の業者を合わせて15人ぐらいいたと述べている¹⁷。東京の貸元からくる紙芝居を、1日平均千人以上の子どもたちに見せていたという¹⁸。1941年6月に、北海道における唯一の街頭紙芝居団体である北海道絵話協会が設立されている。1942年7月に開催された同協会の第2回総会には、札幌、小樽、函館、室蘭、旭川、釧路などの各支部から40名近い人びとが集まったことが、雑誌『北海道教育』に記されている¹⁹。1か月の会費を16円に増額し、郷土関係作品を月10巻ずつ製作することが可決されたという。「昔日の街頭紙芝居とは異なり、その面影は一掃されて、教育紙芝居と街頭紙芝居の距たりはなくなりつつある」とも記されている。

北海道内における街頭紙芝居業者の存在、およびその動向について、さらに明らかにしていく必要がある。北海道絵話協会の設立後、街頭紙芝居業者の動向、例えば業者の数や活動はどう変わったのか、「教育紙芝居と街頭紙芝居の距たりはなくなりつつある」とする記事について、その実態の検証や、そのような動きが同協会の設立とどのようなかかわりがあったのかを検討することなどが課題となる。

4. その他の教育紙芝居関連団体

以下、紙芝居に関わった団体や行政機関の動向を、断片的ではあるが、今後の課題に向けた備忘として記しておきたい。



(1) 函館教育紙芝居聯盟

函館市の教育課長が会長、日新国民学校長が副会長だった。加盟団体は年額 12 円の負担金を納付し、「唱導会」、「国民学校」、「日曜学校」、「幼稚園」、「学徒会」の 5 部門を設け、学校だけでなく街頭でも実演した²⁰。1943 年には座談会²¹や、函館および江差で講習会²²を開催した。

(2) 北海道教育紙芝居利用組合

樺太、北海道における唯一の紙芝居総合配給機関である。本部は札幌市大道に所在した²³。

(3) 教育紙芝居札幌報国隊

北海道新聞社および日本教育紙芝居北海道支部の後援で、陸軍記念日を中心に札幌市大通り広場で大型紙芝居を実演した²⁴。

(4) 北海道庁

「翼賛選挙貫徹」の紙芝居 300 組を道内各市町村に配布し、常会での実演を促した²⁵。また、文部省との共催で北海道文化施設担当者を対象にした講習会を 1943 年 8 月 19 日に札幌で開催した²⁶。

(5) 樺太国民奉公会

樺太紙芝居研究会を指揮下におき、紙芝居の普及をはかった。市町村単位に研究会を組織させ、講習、出張実演、作品の貸し出し、配布などを行った²⁷。

【注】

- ¹ 『教育紙芝居』10月号、日本教育紙芝居協会、1938年、15頁。
- ² 三澤裕見子「『教育紙芝居』の出現と『生活綴方』運動との関連についての一考察—松永健哉の実践活動を手掛かりに—」『有明教育芸術短期大学紀要』第1号、有明教育芸術短期大学、2010年、121頁。
- ³ 『教育紙芝居』7月号、日本教育紙芝居協会、1940年、28頁。
- ⁴ 『紙芝居』12月号、日本教育紙芝居協会、1942年、70頁。
- ⁵ 『紙芝居』2月号、日本教育紙芝居協会、1944年、31頁。
- ⁶ 『紙芝居』8月号、日本教育紙芝居協会、1944年、31頁。
- ⁷ 『教育紙芝居』7月号、日本教育紙芝居協会、1941年、30頁。
- ⁸ 『同人通信』第5号、北海道綴方教育聯盟、1937年。
- ⁹ 『北海教育評論』第16巻6月号、北海教育評論社、1941年、48～50頁。
- ¹⁰ 『教育紙芝居』7月号（第3巻第7号）日本教育紙芝居協会、1940年、29頁。
- ¹¹ 前掲『教育紙芝居』7月号、28～30頁。
- ¹² 『北海教育評論』第17巻4月号、北海教育評論社、1941年、49頁。
- ¹³ 『北海道教育』第284号4月号、北海道連合教育会、1942年、42頁。
- ¹⁴ 『紙芝居』10月号、日本教育紙芝居協会、1943年、31頁。
- ¹⁵ 『紙芝居』9月号、日本教育紙芝居協会、1944年、32頁。
- ¹⁶ 『紙芝居』5月号、日本教育紙芝居協会、1942年、33頁。
- ¹⁷ 谷暎子「札幌村郷土記念館の街頭紙芝居『へカッチ』(7)、日本児童文学学会北海道支部、2012年。
- ¹⁸ 同前。
- ¹⁹ 『北海道教育』第288号8月号、北海道連合教育会、1942年、54頁。
- ²⁰ 『北海道教育』第287号7月号、北海道連合教育会、1942年、51頁。
- ²¹ 『紙芝居』9月号、日本教育紙芝居協会、1943年、25頁。

- ²² 『紙芝居』10月号、日本教育紙芝居協会、1943年、31頁。
- ²³ 『北海道教育』第285号3月号、北海道連合教育会、1943年、41頁。
- ²⁴ 『紙芝居』4月号、日本教育紙芝居協会、1944年、41頁。
- ²⁵ 『紙芝居』5月号、日本教育紙芝居協会、1942年、17頁。
- ²⁶ 『紙芝居』10月号、日本教育紙芝居協会、1943年、31頁。
- ²⁷ 『紙芝居』7月号、日本教育紙芝居協会、1942年、68頁。